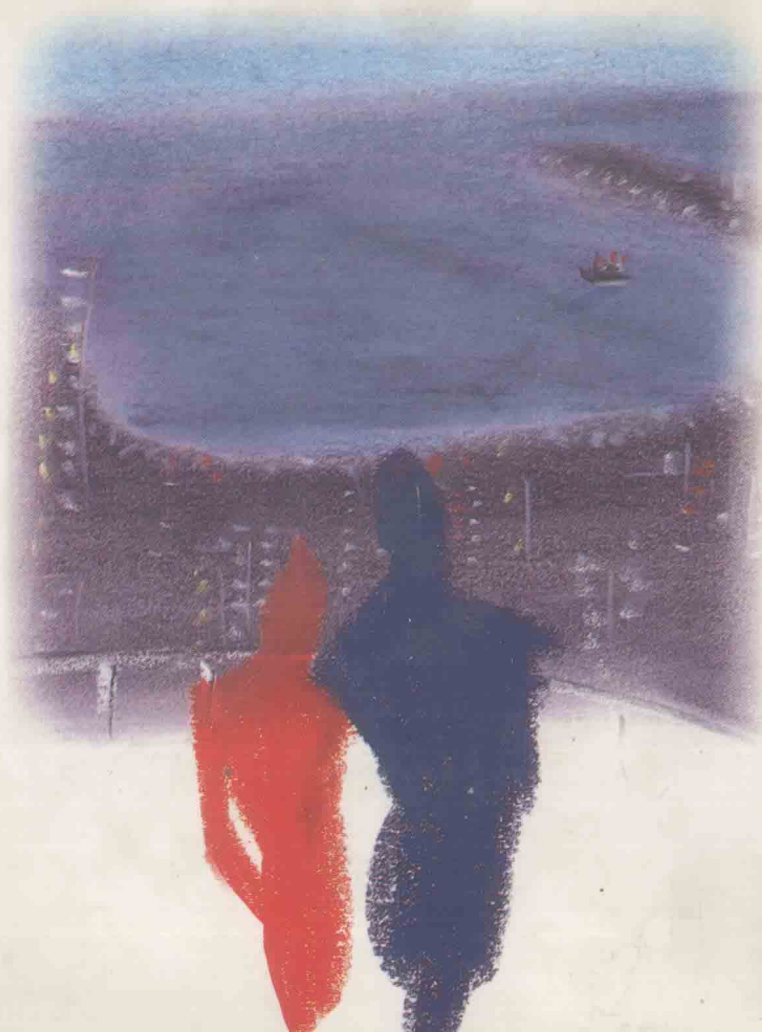


過ぎし日のセナデ

鎌田敏夫

上



過ぎし日のセリタデ

鎌田敏夫

上

立風書房

著者略歴

徳島県出身、早大卒。

シナリオ研究所を出て、井手俊郎氏に師事。

主な作品「俺たちの旅」「俺たちの朝」「土曜ドラマ・十字路」「ちょっと、マイウェイ」「里見八犬伝」「金曜日の妻たちへⅠ、Ⅱ、Ⅲ」「雨の降る駅」「男女7人夏物語」「女と女・華やかな春」「男たちによろしく」「男女7人秋物語」「いこかもどろか」「ニューヨーク恋物語」「太陽にはえろ！傑作選ボス」「会いたくて」他

過ぎし日のセレナーデ(上)



1990年3月15日 第1刷発行

定価 1,300円
(本体 1,262円)

過ぎし日のセレナーデ (上)

著者 鎌田敏夫

発行者 鎌倉 豊

編集者 小野 至

発行所 株式会社立風書房

〒一四一

東京都品川区東五反田三の六の一八

電話 (〇三) 四四七一一一九一

振替東京五―七四四九三

印刷所 信毎書籍印刷株式会社

装幀 安彦勝博

装画 村上みどり

© 1990 T. KAMATA Printed in Japan

ISBN4-651-18509-6 C0095

乱丁本・落丁本はお取替します

淋	人	恋
し	は、	す
く	罰	る
な	を	と
る	う	
罰	け	
を	る	

過ぎし日のセレナーデ(上) 目次

第一章	追憶	5
第二章	めぐり逢い	29
第三章	愛情	59
第四章	あの時のキス	89
第五章	運命の日	117

第六章	十年目の再会	147
第七章	愛の涙	175
第八章	揺れる心	201
第九章	恋の火	229
第十章	対決	257

主な登場人物

榊 隆之 泰隆とは異母兄弟

海棠 泰隆 海棠グループの総帥

矢沢志津子 隆之と泰隆の二人から愛される

海棠家の運転手の娘

森下 真実 神戸の業界紙に勤める女性記者

榊 和行 父と対立していく隆之の息子

石山 卓 レス、トランのコック。隆之の親友

石山 良子 卓の妻

石山 美穂 卓、良子の娘

海棠 絵里 泰隆の妹

山口 昌史 絵里の夫

海棠 綾子 泰隆、絵里の母親

小塚 雅子 海棠家に長年勤める秘書

榊 千恵 隆之の妻

榊 典子 千恵の娘

田村 英子 泰隆を愛するようになる女

おことわり

テレビドラマは制作進行上、流動的な要素があるため、この原作シナリオは、放映されたテレビドラマと多少違いがあります。

第一章 追 憶

南米——東京便のエコノミークラス。

外人スチュワードスが、食事を配っている。

外国の航空会社なので、いろんな人種が乗っている。

満席の座席に、トレーに乗った食事を事務的な素早さで配って歩くスチュワードス。

後ろのスチュワードスが、「カフェ・オア・ティ?」と、聞きながら、お茶を淹れて歩く。

南米人の親子も乗っていて、その客には、スチュワードスもスペイン語で言い直したりしている。

何列か向こうの窓際のシートに、榊隆之(68)が座っている。

髪も白くなって、年老いている隆之。

生きていくことに疲れ切ったように、シートにもたれかかって、眼を閉じている。

スチュワードスに、食事を差し出されても、首を振る。

「カフェ・オア・ティ?」と聞かれても、

隆之「ノー・サンキュー」

と、首を振る。

食事を始める乗客たちの、ざわついた機内で、ひとり眼を閉じている隆之。

同

「まもなく成田国際空港に到着します」というアナウンスが英語とスペイン語である。

乗客が、身の回りのものを片づけ始める。

隆之も、膝にかけていた毛布をたたんで、通りかかったスチュワードスに返す。

座席に置いた本や眼鏡を、足元に置いたバッグに入れる。

身をかがめた動作が息苦しくしたのか、シートに座りなおして、呼吸を整える。

顔に汗がにじむ。

通りかかったスチュワードスが、

スチュワードス「エニシング・ロング?」

隆之「アイム・オーライ」

バッグから出したハンカチで、顔の汗を拭く隆之。気分が落ち着くまで、じっとしている隆之。

気分がもどって、肩に掛けていたカーディガンを、

バッグの中にもどす。

バッグの中に、リボンをかけたプレゼントらしい包みがある。

シートに座って、着陸を待つ隆之。

「成田空港に向かって高度を下げていきます。ベルトをもう一度お確かめください」という、アナウンスがある。

じっと座っている隆之。

成田空港・税関

隆之が、荷物を持つてくる。

その顔に、どこか緊張したものがある。

係員、チラと見る。

隆之、荷物を台に乗せる。

簡単な質問に答える隆之。

係員がバッグを開ける。

表情の変わらない隆之。

隆之「……（緊張している）」

荷物の中を覗いていた係員が、リボンのかった包みを取り出す。

係員「これは？」

隆之「プレゼントです」

係員、隆之の顔を見て、リボンをほどくように指示する。

隆之、ほどく。

包み紙もあける。

中から、厚い木のがっしりした箱が出てくる。

係員、蓋をあける。

きれいなメロディが、飛び出してくる。

オルゴールである。

到着ロビー

隆之が、バッグを手には歩いてくる。

隆之にとっては、十年ぶりの日本なのだ。

賑わうロビーを、弱々しい足取りで歩いていく隆之。

突然、「キャーッ」という歓声が上がって、カメラを持った若い女性の一団が、隆之のそばを駆け抜けていく。

人気タレントが到着して、そのグルーピーらしい。隆之、危うく身をよける。

壁のそばに立ちつくす隆之の耳に、遠くから、また

若い嬌声が聞こえてくる。

もう一団、若い娘たちが駆け抜けていく。

隆之、壁際で立ちつくしている。

隆之のまわりの人たちも、何者だろうと、向こうに視線を走らせている。

また、大きな嬌声上がる。

隆之、それに背を向けるようにして、ひとりロビーを出ていく。

ターミナルビルの表

隆之が出てくる。

リムジンバスの乗り場に並ぶ。

リムジンバス

隆之が乗ってくる。

同

隆之が、座席について、窓の外を見ている。

バスが、走り出す。

林の中（回想）

走る車から見た眼で――

美少女の志津子（9）が、樹の下に立っている。

リムジンバス

隆之（68）が、窓の外を見ている。

林の中（回想）

志津子が、林の中を駆けていく。

車の後部シート（回想）

隆之（13）が、母親のれい（38）と一緒に乗っている。

れいは、緊張した顔で隆之の手をしっかりと握っているが、隆之の心は、窓の外の美少女に向けられている。

れい「向こうの人に何か言われたら、しっかりと胸を張って答えるんですよ」

隆之「……」

れい「あなたが、向こうの子供にひきめを感じることな

んか、少しもないんだから」

れいは、自分に言い聞かせるように言っているのだが、隆之の方は、れいの言うことなんか耳に入っていないくて、窓の外の志津子に気を取られている。

林の中（回想）

車と並行するように、樹々の間を走り出す志津子。

車の中（回想）

志津子を見つめている隆之。

林の中（回想）

緑の木立の中を駆けていく志津子の姿は、まるで幻想的な絵のようにも見える。

スローモーションで、翔ぶように駆けていく志津子。

樹々の下（回想）

隆之（15）と志津子（11）がいる。

隆之、いきなり志津子にキスをしようとする。

志津子、争う。

隆之、志津子を樹に押さえつけてキスしようとする。

志津子、逆らう。

争っているうちに、一瞬、隆之の唇が志津子の唇に触れる。

自分からそうしたくせに、隆之は、びっくりしたように志津子から手を離す。

志津子を見る隆之。

隆之を見る志津子。

その時、何者かが、隆之に飛びついてくる。

泰隆（15）である。

泰隆が、隆之にむしゃぶりついている。

隆之と泰隆、喧嘩になる。

リムジンバス

隆之が乗っている。

外を走り去る風景を見つめている隆之。

六甲ケーブルカー（回想）

二両連結のケーブルカー。

後ろの車両は、屋根があるだけの吹き抜けの車両で

ある。

中学の制服を着て、肩から鞆を下げた隆之が、乗客がひとりも乗っていない後部車両に、ポツンと座っている。

神戸の街を見下ろすようにして、上がっていくケールカー。

隆之が、ただじっと座っている。

その孤独な姿。

リムジンバス

隆之が、過ぎ去っていく窓外の風景を見ている。
隆之、眼を閉じる。

廃墟のホテル（回想）

摩耶山の中腹にある廃墟になった白いホテル。

そのホテルの中に隆之の眼で、カメラが入っている。玄関からロビーに、荒れ果てたホテルを、ゆっくりと入っていくカメラ。

ロビーから食堂に、そして、表のテラスに出ていくカメラ。

あちこちに、ビール瓶や、ダンボールが転がっている。

る。

カメラ、テラスに出ていく。

テラスの柵にもたれて、白いフレアーのワンピースを着た女がいる。

森下真実（28）。

真美、ゆっくり隆之（カメラ）の方を振り向く。

その強い眼。

ビナスブリッジ（夜——回想）

隆之（48）が、志津子（44）を抱きしめる。

神戸の山の中腹にある展望ブリッジからは、街の灯が宝石を撒いたように見えている。

隆之、志津子を抱きしめる。

二人とも、せつない。

志津子、隆之に何か言おうとする。

しかし、言葉にはならない。

そのもどかしさを、体で表わそうとでもいうように、志津子も、隆之を激しく抱きしめる。

街の灯が、二人の背景いっぱいにきらめいている。

光の海の中で、激しいキスをしていく隆之と志津子。

中央卸市場（回想）

広い市場の中を、向こうから和行（6）が、走ってくる。

隆之（34）に飛びつく。

隆之、和行を抱きしめてやる。

隆之の妻の千恵（27）がせつないまでの嬉しきで、二人を見ている。

廃墟のホテル・ロビー（回想）

荒れ果てたホテルの中で話している隆之（34）と志津子（30）。

隆之「女房がいて、子供がいて……ただいまって帰ってきたら、迎えてくれる笑顔があつて……おれは、初めてそんな家族を持ったんだ……おれが、生まれて初めて持った宝物なんだよ」

志津子「……」

隆之のアパート（回想）

銃弾が、部屋の中のを、かたつばしからふっ飛ばしていく。

砕け散る置物や鏡。

千恵（27）の体にも、あつという間に銃弾がはじける。

千恵、倒れる。

そばにいた娘の典子（9）の体も、銃弾がふっ飛ばす。

下の子供の和行（6）が、ベランダの小さな隙間に、必死で隠れている。

隆之のアパートの廊下（回想）

隆之が飛び出してくる。

遠まきになっている近所の人たちを、叫び声を上げて、かきわけていく。

隆之「和行！」

隆之、階段を駆け降りていく。

表の道（回想）

パトカーが何台か停まって、人だかりがしている。

隆之が、叫びながら飛び出してくる。

隆之「和行!!」

廊下の隅に、近所の人に肩を抱かれている和行の姿

が見える。

隆之「和行!!」

と、走っていく。

和行、隆之の姿を見て、走って逃げる。

隆之「和行!!」

和行、走っていく。

隆之「和行!!」

と、追う。

和行、必死で逃げていく。

三宮・楽天地（回想）

隆之（48）が、龍村（52）と歩いていく。

美也（22）が、見送っている。

淋しそうな美也。

隆之、振り向こうとする。

龍村が、その腕をつかんで言い聞かせるように言う。

龍村「振り向く値打ちなんかない女だよ、柳さん」

美也、心細げに、ただじっと立っている。

隆之と龍村が行く。

楽天地の端まで来て、表に曲がろうとする時、隆之

が、ふっと立ち止まって、美也の方を振り向く。

美也、じっと立っている。

遠いその姿、いかにも心細げである。

龍村が、センチメンタルな隆之の心をふっと嘲笑する。

隆之、気持ちを振り切って出ていく。

美也、じっと立っている。

リムジンバス

隆之が乗っている。

高速道路を走るバス。

隆之、またふっと胸が苦しくなる。

前の背もたれに顔をもたせかける。

苦しさは、止まらない。

隆之、胸のペンダントから、ニトロを出して、口に入れる。

バッグの中を掻き回して、小さな水筒を出す。

バッグの中には、リボンをかけられたプレゼントの包みが入っている。

水と共に、薬を飲み干す隆之。

しばらく、じっとしている。

高速道路が、東京のビルの中に入っていく。

胸の苦しさが薄らぐまで、じっとしている隆之。

窓から表を見る。

東京のビルの中に入っていくバス。

隆之、窓外を見ている。

箱崎・ターミナルビル

隆之たちが、バスから降りてくる。

電話のところに行く隆之。

電話をかける。

「この電話は、ただいま使われておりません」とい

う応答が返ってくる。

隆之、受話器を置く。

タクシー（夜）

隆之が乗っている。

東京の街を走っていくタクシー。

銀座（夜）

タクシーが停まる。

隆之が降りる。

路地（夜）

隆之が歩いていく。

小さなバアがある。

隆之、入っていく。

バア（夜）

隆之が入ってくる。

カウンターと、ボックスだけの小さなバア。

隆之、止まり木に座る。

若いホステスが来る。

ホステス1「いらっしやい」

と、おしほりを出す。

隆之「ここに、森下真実さんという人がいたんだが……」

ホステス1「真実さん……？」

カウンターの向こうにいる先輩のホステスに聞きに

いく。

隆之、バアを見回す。

ホステス1「ホステスもどってくる。」

ホステス1「前のママだった人ですか、ここなの？」

隆之「ああ」

ホステス1「五年前に死んだんだって」

隆之「……」

向こうから先輩のホステスが来る。

ホステス2「前のママのお知り合いですか？」

隆之「うむ……」

ホステス2、カウンターの引き出しから、きれいな髪止めを出す。

ホステス2「前のママのものが、まだ残ってたの……捨てるわけにもいかないし……今のママさん、困ってるんです」

と、隆之の前に置く。

ホステス2「誰か、知り合いの方にも上げてくださいますか？」

と、向こうに行く。

隆之、カウンターに置かれた髪止めを見る。

神戸港（回想）

ランチが行く。

その船先に、立っている真実。

風にあおられる髪を、髪止めが、しっかりと止めている。

真実の家（回想）

二階にある寝室のベッドに起き上がって、寝ている隆之（38）を見つめている真実（28）。

開け放たれた二階の窓の向こうに、瀬戸内のうらかな海が見えている。

真実、隆之に挑むような言い方をする。

真実「人を好きになるっていうのは、その人に人生を賭けるってことよ」

隆之、真実を見る。

真実、隆之を見る。

真実、隆之の肩を強く噛む。

隆之、思わず真実を引き離す。

真実「あなたとなら、死んでもいい」

真実の眼に、涙が溜まっている。

隆之、見る。

真実、隆之にむしゃぶりついていく。

真実をベッドに押さえつけるようにして、激しく唇を吸う隆之。